

上遠野 徹 札幌の家

1968年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

ひと月ほど前、札幌でアントニン・レーモンドの設計した聖公会の教会を見学する機会がありました。見学に誘ってくれた建築家の友人によれば、レーモンド作品は北海道にたったひとつしかないとのこと。「聖ミカエル教会」という名のその教会は、赤煉瓦の控え壁にレーモンドお得意の丸太挟み方杖架構の屋根を載せた建物で、簡素ながら、骨太で力強く、北国の大地にしっかり根を下ろした風格のある作品でした。

この教会を見学した翌日、私は上遠野徹さんの自邸「札幌の家」を訪れたのですが、偶然にも、この「聖ミカエル教会」の現場を担当したのが、竹中工務店時代の上遠野徹さんだったのです。私が前日にこの教会を見学したことを話題にしたことで、そのことが判明したのですが、上遠野さんは、「札幌の家」の話に入る前に、完成した教会を訪れたときのレーモンド夫妻の印象などを話してくれました。そうこうするうちに「そうそう、レーモンドと言えば、ずっと昔、レーモンドが素晴らしいディテール集を出版したことがありましてね…」と上遠野さんは語り始めました。じつは、これもまったくの偶然ですが、1938年に出版されたそのディテール集[*]を、私は大学を卒業した翌年に、友人の実家（友人の父親は建築家でした）のアトリエで見つけ、その精緻を極めた美しい図面にしばしば見惚れました。さっそく、門外不出というその本を、「そこをなんとか…」と拝みたおして借り出し、一冊丸ごと複製したことがあります。



室内に一歩足を踏み入ると、目の前にこの眺めが待っている。天井の高さを抑えた重心の低い空間は自然に庭へと繋がっていく

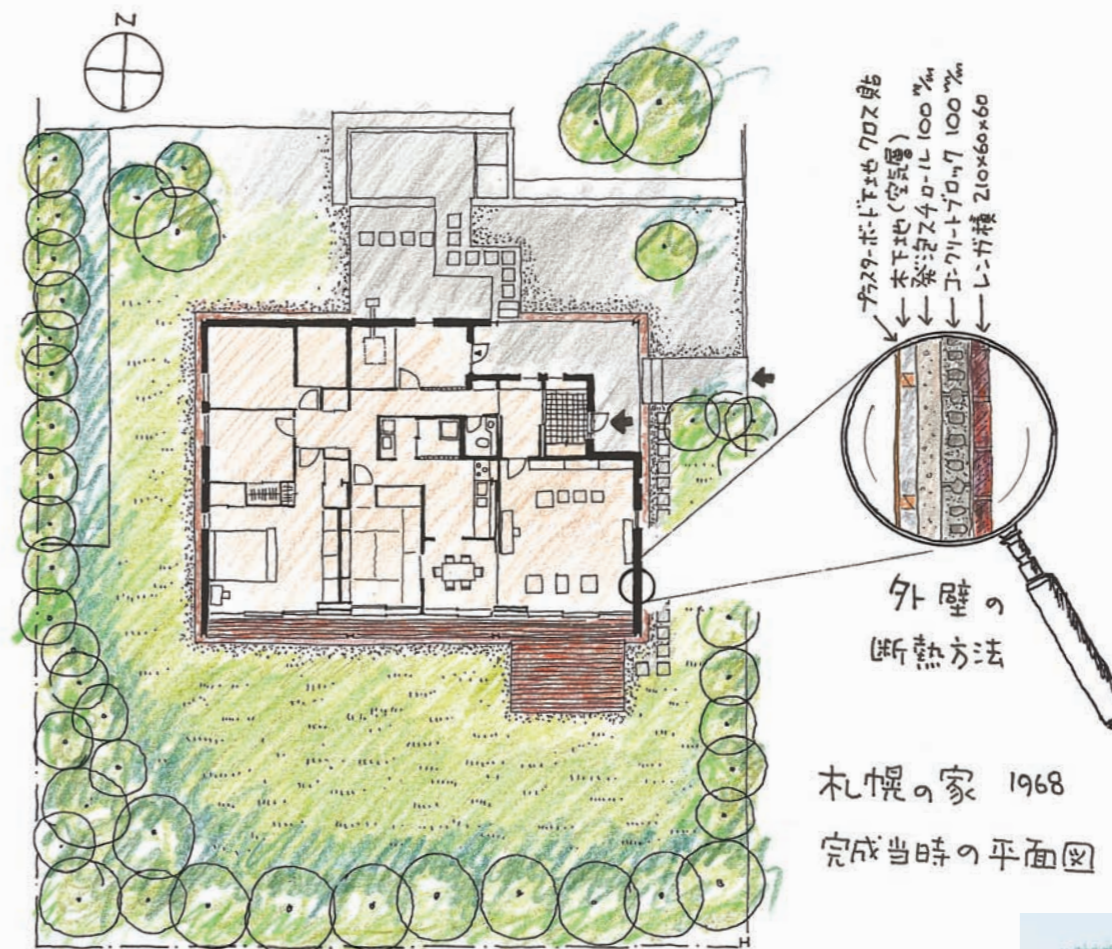
そればかりではありません。どうやらこの本と私とは赤い糸で結ばれていたらしく、手に入れることなど夢にも考えていなかったこの本が、8年ほど前、希覓本を扱う古書店の世話で私の書棚に並ぶことになりました。

この本を眺めるたびに私は、レーモンドはディテールを非常に大切にしている、原寸図の一枚一枚を自ら厳密にチェックして承認のサインしていた、という話を思い出すのですが、こうした姿勢は、このディテール集を今でも座右の銘にされている様子の上遠野さんにも、そっくりに受け継がれているように思います。

□

上遠野さんの「札幌の家」の一番大きなテーマは、やはり「寒冷地の住宅はどうあるべきか？」という問いかけに、自邸という作品をもって真正面から答えることだったと思います。別な言い方をすれば「北海道型の住宅」、「札幌スタイルの住宅」の上遠野流の提案だったと思うのです。

上遠野さんが、そのために、断熱の方法に独特の工夫を凝ら



換を開けるたびに空間が奥へ奥へと繋がっていく感じは、日本座敷のようです



玄関ポーチへと誘うミース風の2枚の軽快なステップ

し、新しい材料と工法をいち早く取り入れ、ディテールを練りに練り、細心の注意を払って施工監理したことは、少し注意深くこの住宅を見れば即座に理解できます。こうした努力の積み重ねがあって寒冷地住宅の規範となる名作住宅が生まれたのです。完成後ほぼ40年にわたって文字通り風雪にさらされ、ますます独特の渋みと風合いを増してきたこの魅力的な住宅が、日本建築家協会の25年大賞や、DOCOMOMO100選に選ばれたのは、当然の結果だと言えるでしょう。

建物はコルテン鋼でガッチリとした骨格を組んだ後、この骨格の間に煉瓦壁とペアガラス入りの特注製作のサッシ（これもコルテン鋼です）を嵌め込んで外皮を覆っています。これで豪雪も極寒も寄せ付けない堅牢で頼りがいのある建物が生まれました。先ほど、レーモンドの建築について「簡素ながら、骨太で力強く、北国の大地にしっかり根を下ろした風格のある建築」と書きましたが、この言葉はそのままぴったり、この「札幌の家」に当てはまるわけです。

そればかりではありません。コルテン鋼の錆び色と赤煉瓦のテクスチャは、雪景色にも鮮やかな新緑にもよく映えます。つまり、四季を通じて、ただ眺めるだけでも素晴らしく美しい建物であることを言い添えておきたいと思います。

ところで。

見学後2週間ほどしてから、上遠野さんから上遠野建築事務所の作品集2冊と、「札幌の家」の図面（配置平面図、平面図、矩計図、平面詳細図）が送られて来ました。見学当日は、図面を見ながら建物の内外を歩き回ったわけですが、外壁の断熱が実際にはどうなっているのか、そして寸法はそれぞれどれくら

いか、など、寒冷地仕様のディテールが気になり、上遠野さんに、そのつど質問して教えてもらいました。とはいえ、やはり図面で確認したくて、帰りがけに図面を見せて欲しいと、お願い（おねだり？）しておいたのです。

上遠野さんは、図面に工事後に変更した部分や、特筆すべきことから、私がうっかり見落としそうな箇所などを、赤いサインペンで細かく書き込んでくれていました。その書き込みが、非常に細かい字（小さい字は3mm角ぐらいです）でなされているので、老眼の私はシャーロック・ホームズのように大きな眼鏡を使いながら仔細に図面を読み込んでいきました。

上遠野さんの書き込みは、この住宅を理解する上で大いに役立ちました。というより、このメモ的な書き込みから、私は上遠野さんのこの住宅に対する並々ならぬ意気込みと自信のほどを、ひしひしと身近に感じることができたのです。

たとえば、書き込みのひとつは外壁を指しており「焼きすぎレンガ 不揃いを集めて試みを」となっていました。そして、コルテン鋼の柱と梁については「化粧柱、化粧梁すべて現場コーセツ 40年程経過してまだ手を入れずそのままの状態で使用されている」と書かれています。ね？、並々ならないでしょ



桂離宮・古書院の月見台を写したという煉瓦敷きの月見台でも建築界の大先輩を質問責め



光、低めの天井の居心地の良さ、居間と食堂の関係、会話や生活音の反響の具合…室内をゆっくりと眺め回し、ひと呼吸したとき、ようやくこの空間が、吉村順三先生の「自邸」の居間と食堂とちょうど同じぐらいの広さであり、天井高もほとんど同じであることに思い当たりました。部屋のたたずまいだけでなく“空気のたたずまい”まで吉村邸と双子の兄弟のように似ていると、あらためて感じ入ったのでした。

初めてこの住宅を建築雑誌で見たとき、私は、鉄骨、煉瓦、

ガラスの特徴的な外観から、ミースの「イリノイ工科大学」の建物や「フィリップ・ジョンソン自邸」などを真っ先に思い浮かべました。ところが今回、室内に足を踏み入れてみて、その予想が見事に裏切られたと思いました。そこには近代建築にありがちな建築理論に裏付けられたストイックな印象も、合理主義、機能主義一点張りの頑固一徹の気配はなく、写真や外観からは想像できなかった、気さくで穏やかな空気がゆったりとたゆたっていたのです。

「ちょっとテラスに出てみましょうか?」。誘われるままに、コルテン鋼で縁取られた煉瓦敷きのテラスに出たとたん、ふと脳裡に浮かんだことがありましたが、上遠野さんは、私の思いついたそのことをすっかり見透かした様子で…

「そうです。このテラスは桂離宮の月見台の真似なんですよ!」と言い、穏やかな笑みを浮かべました。それは、百戦錬磨の老建築家にとっておきの笑顔でした。✿

[*] [ANTONIN RAYMOND ARCHITECTURAL DETAILS] (国際建築協会 1938)



上遠野さんはキッチンと紺色のジャケット姿なのに、訪ねる側の私がTシャツではいけませんねえ。大反省デス!

う?

また、「床 バリアフリー 全室床暖房 鋼管温水を通す現在まで故障なし自慢の床」の書き込みには、それぞれ得意満面の上遠野さんの顔が目に浮かびますし、南面の「H=2100の複層ガラスが 16.5m全面に納まる」という特記を読むと耳元に、「どうだ、見てくれ!」という声が聞こえるような気がするのです。

なかでも私は、矩計図の壁体内の断熱材（発泡スチロールと書かれていますのですが、スタイロフォームと同等品かどうか不明です）を指して書き込まれている“本邦初演”という、建築用語としてはやや違和感のある、それでいて妙に感じの出ている表現に、上遠野さんの自負のほどと、どことなくチャーミングな人柄を感じ、友人のような親近感を覚えたのでした。

□

完成後ほぼ40年を経たこの住宅は、これまでに部屋の使い替えの変更や、仕上げの変更など、その時々に合わせて少しずつ変化してきました。

もっと正確に言えば、この建物自体が、そうした変化に柔軟に対応できるように、あらかじめ設計されているのです。今回、図面を眺めていて気づいたのですが、この住宅内部の間仕切り壁は浴室まわりを除いては、いわゆる柱や間柱を下地にした壁ではなく、厚さ50mmのパネル状の壁です。鉄骨と煉瓦とペアガラスで包まれた室内が、言ってみれば、建具のような簡易壁で自由自在に仕切られているのです。室内に、日本建築特有の融通無碍な空間の流動性が感じられるのは、おそらくそのせいではないかと思えます。また、そのこととも無関係ではないと思えますが、居間に足を踏み入れたとたんに、私は「ああ、この空間のことをよく覚えている」という奇妙な感覚にとらわれました。障子を通して拡散して室内を包み込む柔らかな自然

なかむら・よしふみ—建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972~74年、穴道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976~80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。

三谷さんの家(1986)、REI HUT(2001)などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』(新潮社 2000)、『意中の建築上・下』(新潮社 2005)などの著作がある。